SPECIAL REPORT

わが国の乳製品市況動向と国際乳製品相場高騰の背景

乳製品の国際相場が昨年秋以降高騰しており、その余波がわが国のバター、脱脂粉乳の市況や需給にも表れ始めている。乳製品の国際相場が値上がりしているのは、ＢＲＩＣｓ（ブリックス）と呼ばれるブラジル（Ｂ）、ロシア（Ｒ）、インド（Ｉ）、中国（Ｃ）が経済成長に伴って、乳製品需要が急増していることと、中東産油国やアジア諸国などの安定的需要に支えられているものだ。今号ではわが国のバター、脱脂粉乳の市況や需給と、国際乳製品相場高騰の背景などを解説する。

6月の脱粉高は国際相場高騰も一因

農水省が毎月公表している牛乳乳製品関係の統計のひとつに「主要乳製品大口需要者向け価格」がある。

この統計は、乳業メーカーなどが菓子・パン類、飲料、一般加工食品の製造会社や、ホテル・レストランなどの大口需要者に、バターや脱脂粉乳を業務用として販売している価格を調査したもの。

それによると、（表１）のように、６月と７月の動きに変化があった。バター、脱脂粉乳ともそれまでの数ヵ月間に比べて小幅だが値上がりがみられ、特に６月の脱脂粉乳価格は前月比22円高となった。その理由は脱脂粉乳の在庫減（表２）とも関係している。

脱脂粉乳在庫は６月と７月で合計して9,400㌧減少した。脱脂粉乳の月平均需要量は１万5，600㌧だから、この２ヵ月間で月平均需要量よりさらに６割も

（表1）業務用バター、脱脂粉乳の大口需要者価格

（単位：円）

		バター（１kg）	脱脂粉乳(25kg)
06年	４月	947	13,062
	５月	947	13,047
	６月	948	13,005
	７月	950	13,020
	８月	943	13,013
	９月	943	13,010
	10月	943	13,002
	11月	944	13,001
	12月	944	13,007
07年	１月	944	13,004
	２月	944	13,019
	３月	944	13,019
	４月	944	13,019
	５月	944	13,019
	６月	945	13,041
	７月	946	13,049

農水省調べ。価格は消費税を含む。

（表2）バター、脱脂粉乳の推定期末在庫量

（単位：千㌧）

		バター	脱脂粉乳
06年	４月	31.6	76.9
	５月	32.7	79.7
	６月	32.4	78.8
	７月	32.0	77.9
	８月	31.8	75.5
	９月	29.3	70.6
	10月	26.7	66.9
	11月	23.9	63.2
	12月	21.5	64.3
07年	１月	24.1	68.8
	２月	23.6	69.2
	３月	23.2	68.3
	４月	23.1	68.9
	５月	23.8	69.1
	６月	24.4	65.3
	７月	23.7	59.7

農水省牛乳乳製品課調べ。

の需要増となったわけで、これが６月、７月の価格高になったともいえる。

また、７月の脱脂粉乳在庫は５万9,700㌧で、６万㌧割れとなったが、これは01年12月末の５万9,279㌧以来５年７ヵ月ぶりの水準。農水省では、「６万㌧割れは、生産者や乳業メーカーの努力による脱脂粉乳在庫削減対策の成果のほかに、海外乳製品市況の先高感の中で、ユーザー（実需者）が国産脱脂粉乳を手元に確保する動きが反映されているためではないか」として、国際相場高もその一因にあげている。

実際、サプライヤー（供給業者）の中には、ユーザーが国際相場の高騰に対して、５月以降輸入品から国産脱脂粉乳に切り替える動きが活発化したことを受けて、国産脱脂粉乳価格の安値を是正し始めているところもある。

こうした国際乳製品相場を考慮した業務用乳製品の売買は加工原料乳不足払い法が施行された66年度以来、初めての動きだ。このことは、サプライヤーもユーザーも乳製品のマーケットがグローバル化しているとの認識が醸成されてきていることの表れといえる。

前記のように、７月末の脱脂粉乳在庫は月平均需要量の３・８ヵ月分と多い。しかし、生乳の減産型計画生産もあって、脱脂粉乳の生産量は06年４月から減少基調で推移しているため、今年はクリスマスなど年末需要に向けて、９、10月には在庫が急減、年内には適正在庫水準の２ヵ月に達するとの見通しもある。

「わが国の業務用乳製品市場は底が浅い」との言葉は30年以上も前から語り継がれてきているところだが、07年１年間だけみてもこのような需給緩和から需給均衡に様変わりする状況で、08年にはひっ迫という事態を迎えることになるかもしれない。

在庫が多いのはバターも同様で、このため、バターの大口価格はまだ動きが鈍い。しかし、農畜産業振興機構が輸入するカレントアクセス（義務輸入。以下「ＣＡ」）のバター価格は国際相場の高騰で値上がりしており、先行きの売り渡し価格は上昇する可能性が大きい。

バター在庫は直近の７月が２万3,700㌧で、月平均需要量である7,500㌧の３・２ヵ月分に当たる。このうち主要14者の在庫は２万1,000㌧で、６月末に比べ640㌧減、前年同月比では9,000㌧減と大幅だ。脱脂粉乳同様、06年４月からの生産減の一方で、需要が堅調なことから、着実に需給が改善している。

業務用のタイプ別ではバラ物（20㌔包装）が１万4,300㌧で、６月末に比べて1,000㌧減、プリント物（450㌘など小包装）、シートタイプ（パン、ケーキ向け特殊用途）などは5,700㌧で500㌧増となっている。

乳業メーカーは、需要がおう盛で、不足気味のプリント物などを年末に向けて優先的に生産し、在庫のため込みに必死だが、思ったように積み増しされていない。プリント物の生産に重点を置くため、バラ物の生産量は減少しているが、これはＣＡバターで対応している。しかし、バラ物の在庫は減少速度を早め、出荷調整をしているほどで、９月から前年実績の２割削減を打ち出したメーカーもある。年末まで国産バター在庫が増える可能性はないし、来年の積み増しも微妙だ。

06年度分のＣＡバターの残量は８月末で2,200㌧となったが、年内の消化は確実だ。07年度分としてわが国が輸入するＣＡはバターで約6,600㌧、デーリースプレッドで2,000㌧程度だが、国際乳製品相場の高騰の一方で、輸入数量の確保という課題も生じている。

■ ＥＵの輸出補助金、全乳製品がゼロ

６月14日に世界の乳製品関係者を驚かすニュースが駆けめぐった。ＥＵは「15日からバター、チーズの輸出補助金をゼロにする」というもので、これでＥＵの乳製品輸出に関わる補助金は５品全部がゼロとなった。理由は乳製品の国際相場が高水準のためである。ＥＵの乳製品輸出補助金の最近の推移は（表３）の通りだが、最初にゼロとなったのは06年６月の脱脂粉乳で、次にゼロとなったのは07年１月の全脂粉乳と練乳。バターの輸出補助金は06年11月以降毎月カットされていたが、６月のカットは100㌔当たり50ユーロ（約8,000円。１ユーロ160円換算）がいっぺんに全額カットとなり、チーズも25ユーロ（約4,000円）全額カットという措置となった。

（表3）ＥＵの乳製品輸出補助金の推移　（ユーロ／100㎏）

	脱脂粉乳	全脂粉乳	バター	チーズ	練　乳
06年　４月	5.00	54.00	99.50	56.30	5.895
５月	3.00	54.00	99.50	56.30	5.895
６月	0	54.00	99.50	51.23	5.895
７月	0	54.00	99.50	51.23	5.895
８月	0	54.00	99.50	51.23	5.895
９月	0	54.00	99.50	51.23	5.895
10月	0	52.00	99.50	50.00	5.895
11月	0	31.00	98.50	43.50	3.52
12月	0	21.00	97.00	43.50	2.38
07年　１月	0	0	95.00	43.50	0
２月	0	0	93.00	34.80	0
３月	0	0	84.00	34.80	0
４月	0	0	75.00	34.80	0
５月	0	0	50.00	25.00	0
６月	0	0	0	0	0

（注）「日刊酪農乳業速報」集計。各月末の補助金。チーズはチェダー。

ＥＵの補助金付き乳製品輸出は、1960年代から、ＥＵ（当時のＥＥＣ）域内にあった大量の過剰在庫乳製品を消化するため、多額の補助金をつけて輸出したことに始まる。それが70年代から90年代に入ると、ＥＵ（ＥＥＣ）の輸出補助金付きの乳製品価格が国際乳製品指標価格となっていた。

ところが、ガットウルグアイラウンドでＥＵの補助金付き乳製品輸出が問題視された。95年からＷＴＯ（世界貿易機関）体制になり、01年以降の新しい貿易ルールを検討していく中で、05年12月の香港閣僚会合でＥＵはすべての乳製品輸出補助金を13年までに廃止することを表明した。

こうした背景もあったため、６月の「全品ゼロ」は６年も前倒しとなったことから、世界を驚かせることになった。しかし、ＥＵの農業・農村開発担当者委員会を代表するフィッシャー・ボエル委員は「国際価格との関係でゼロにしたもので、一時的措置」としており、乳製品の国際相場が再び軟調になれば、13年までに輸出補助金が復活する可能性のあることを示唆している。

ＥＵにとってみれば、アジアやアフリカなどは多額の補助金を付けて開拓した市場でもあるわけで、補助金なしの乳製品輸出は自らの市場を失うかシェアを落とす危険性もないわけではない。というのも、90年代以降、ニュージーランドやオーストラリアなどオセアニア２カ国が国際市場での地位を着実に上げ、将来もその方向を固めているからだ。

■ 需要急伸で国際相場は2倍以上

ＥＵが乳製品の輸出補助金をゼロにしたのは乳製品の国際相場が高騰し、補助金のない輸出価格でも国際競争力があると判断したためだが、国際相場が高騰した理由は乳製品の供給量を上回る需要量があることにほかならない。オーストラリアの100年に１度といわれる大干ばつがここ数年間のうちに２度も起こり、世界市場への供給量が減少したことも一因であるにせよ、需要の急伸の方が要素としては大きいようだ。

この需要急伸はＢＲＩＣｓ（ブリックス）と呼ばれるブラジル、ロシア、インド、中国の各国で経済成長に伴う購買力が増大しているためだ。ＥＵは、加盟27カ国合計で１億5,000万㌧の生乳生産量だが、単独の国としては、インドは9,700万㌧、中国は3,300万㌧を

誇り、アメリカの8,200万㌧台を加えて世界の生乳生産国上位ビッグ３を形成している。そのインドと中国はともに年々生乳生産量を増やしているが、それでも国内生産量は需要を満たしているわけではない。これに中東産油国、東南アジアの堅調な需要があるため、当分、乳製品の国際相場高騰は沈静化しそうにないとみられている。

現に、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）とＦＡＯ（国連食糧農業機関）が７月に発表した共同レポート「2007－2016農業見通し」でも、インドと中国が世界の乳製品需要を引っ張るとし、すべての乳製品輸出で増加が見込まれるのはニュージーランドと予測している。また、今後９年間で主要な乳製品のうち相場が下落すると予測したのはカゼインだけで、それ以外の乳製品は緩やかな値上がりを続けるとしている。

そこで、最近の乳製品の国際相場の推移をみると、（表４）の通りである。

乳製品の国際相場が急騰したのは昨年11月からだが、現在（07年８月）と１年前の06年８月の西ヨーロッパ港積み１㌧当たりＦＯＢ（本船渡し値段）を比べると、07年８月のバターは3,300米ドル（約38万6,100円。１米ドル117円換算）～3,800米ドル（約44万4,600円）で、前年比204％～217％、脱脂粉乳は5,100米ドル（約59万6,700円）～5,300米ドル（約62万円）で237％～236％、全脂粉乳は4,850米ドル（約56万7,500円）～5,250米ドル（約61万4.300円）で231％～239％となっており、いずれも２倍以上に高騰している。これらはいずれも史上最高水準にある。

また、この値動きで特徴的なのは脱脂粉乳の相場が全脂粉乳を上回っていることである。通常は全脂粉乳相場が脱脂粉乳相場を上回っているが、それが逆転した。2000年代に入って脱脂粉乳相場が急騰したのは00年６月（1,900～2,000米ドル）から01年５月（2,000～2,050米ドル）の１年間だが、この時も脱脂粉乳相場は全脂粉乳相場を50～200米ドル上回って推移した。ＥＵは07年に入っても世界市場への脱脂粉乳供給に比較的余裕があったが、乳製品の生産を付加価値の高いチーズにシフトしている面もあって、需要急伸に対し

（表4）最近の乳製品国際相場の推移　（米ドル／ｔ。ＦＯＢ）

	バター	脱脂粉乳	全脂粉乳	チーズ
06年　４月	1,750－1,800	2,000－2,200	2,100－2,230	2,625
５月	1,700－1,830	2,050－2,150	2,100－2,200	2,625
６月	1,650－1,800	2,050－2,150	2,100－2,200	2,625
７月	1,620－1,750	2,000－2,150	2,100－2,200	2,625
８月	1,620－1,750	2,150－2,250	2,100－2,200	2,600
９月	1,600－1,750	2,130－2,110	2,200－2,300	2,620
10月	1,650－1,750	2,250－2,350	2,200－2,300	2,625
11月	1,850－1,950	2,700－3,000	2,500－2,700	2,750
12月	1,900－2,000	2,900－3,100	2,700－3,100	2,800
07年　１月	2,000－2,100	3,000－3,200	3,000－3,200	2,900
２月	2,050－2,200	3,250－3,350	3,150－3,250	2,925
３月	2,250－2,350	3,650－3,750	3,500－3,700	3,100
４月	2,500－2,700	4,100－4,400	4,100－4,350	3,250
５月	2,700－3,000	4,700－5,000	4,600－4,900	3,500
６月	2,700－3,000	4,900－5,200	4,600－5,000	3,950
７月	2,900－3,400	5,000－5,250	4,800－5,250	4,350
８月	3,300－3,800	5,100－5,300	4,850－5,250	4,900

（注）「ＺＭＰ」調べ。各月末の相場で、バター、脱脂粉乳、全脂粉乳は西ヨーロッパ港積み。チーズ（チェダー）はＮＺ港積み。

て供給に限度が出始めている。

全脂粉乳の用途は先進国以外は直接飲用に仕向けられる比率が高いが、脱脂粉乳は用途が直接飲用だけでなくヨーグルト、乳酸菌飲料のほかに、パン、菓子や一般加工食品の原料にも広く使われるという特性がある。

■ 欧州産脱粉を輸入すれば日本の倍に

参考までに、バターと脱脂粉乳の相場を日本の大口需要者価格（表１）と比較すると次のようになる。

西ヨーロッパ港積みの７月のバターの中心値を3,150米ドル（約36万8,550円）とすれば、７月の大口需要者価格の１㌧当たり94万6,000円に対して39％に相当し、脱脂粉乳を中心値5,200米ドル（約60万8,400円）とすれば、大口需要者価格の１㌧当たり52万1,960円に対して117％に相当する。

つまり、脱脂粉乳は関税、輸送費などを加えなくても、国際相場はわが国の市況を17％も上回るほどの高値にあるわけだ。しかも、これをわが国に輸入しようとすると、関税、諸掛かりなどを加えると国内の倍以上になる計算だ。

また、バターにしても、農畜産業振興機構が６月に行った07年度ＣＡバター6,625㌧の輸入商社入札の結果は、ヨーロッパ産（4,467㌧）の輸入価格は１㌔平均845円で落札した。７月の大口需要者価格は946円だから、国産物は101円高でしかないほど輸入物との差が縮小してきている。ちなみに５年前（02年10月）のＣＡ輸入落札価格は１㌔271円で、大口需要者価格は950円で、国産物は679円高だった。国産物に値動きがないためもあるが、国際相場の高騰はこの点からも分かる。

■ 相場高が日本と先進国乳価を値上げ

こうした史上まれにみる乳製品の国際相場高騰はＥＵ、ニュージーランドを代表する世界的な乳業メーカーの支払い乳価値上げという現象となって表れた。

日本ではホクレンが８月下旬に、07年度の新規需要者向けの加工原料乳価について上期分は１㌔当たり２円46銭値上げして50円に、下期分は10円42銭値上げして57円96銭とすることで乳業メーカーと合意したことを明らかにした。この新規需要向けとは輸入粉乳調製品を北海道産脱脂粉乳に置き換える用途を指す。

わが国の指定団体と乳業メーカーは、２年前から脱脂粉乳の過剰在庫解消対策として、輸入の粉乳調製品や飼料用脱脂粉乳と国産脱脂粉乳の置き換え努力を続けてきたが、ホクレンは今回、国際的な脱脂粉乳相場の高騰を受けて、輸入粉乳調製品に置き換える分の道産脱脂粉乳（製品重量で約２万1,000㌧。06年度実績は約２万9,000㌧）に相当する生乳の値上げを乳業メーカーに求めていた。通常取引の脱脂粉乳向け生乳は据え置きの57円96銭となったが、国際相場を念頭に置いた交渉・決着は初めて。

折しも北海道では08年度から大手乳業によるチーズ工場の新・増設で生乳需要増が期待されている。チーズの国際相場も１年前に比べ２倍近い値上がり（表４）となっていることから、08年度のチーズ向け乳価交渉の成り行きも注目されるところだ。さらに、脱脂粉乳やバターの在庫量については乳業メーカーに開きがあるものの、今年度中にも需給改善の可能性が見え始めたことから、「08年度は主要乳製品の価格や需給がターニングポイントの年になる」可能性がある。

海外では、国際的な乳製品輸出企業で、デンマークとスウェーデンに本社を置くアーラ・フーズとニュージーランドのフォンテラは９月から乳価を６月に比べそれぞれ11％、16％値上げした。アーラ・フーズは生乳１㌔当たり２・34デンマーククローネ（約50円）、フォンテラは乳固形分１㌔当たり６・40ＮＺドル（約547円）とした。この両者はともに酪農協を母体とする農協乳業だが、乳価値上げの理由を、国際的な乳製品相場高に伴う支払い余力があることと、会員酪農家に対して生乳生産意欲を喚起するためとしている。

この両者の支払い乳価値上げは特異なことではなく、オーストラリア、アメリカはもとより、ＥＵ域内でも乳価値上げラッシュとなっている。中でもＥＵの多くの国は06年の乳価水準が低かったこともあり、廃業や燃料代値上げによる生産コスト増などでクォータ（生乳出荷割り当て）を割り込む危機感もあって、乳

価値上げとなっている。

国際相場の高騰続けばＣＡ実行に影響

国際乳製品相場が高騰している現在を踏まえてＯＥＣＤとＦＡＯは共同レポートを発表し、今後９年間は、カゼイン以外の乳製品は緩やかな値上がりが続くと予測した。インドと中国が需要を引っ張るためとしているが、来年の北京オリンピックを控えてバブルともみられる中国経済の先行きの観測は専門家に任せることとして、ここまで世界の乳製品需要の急伸を支えてきたＢＲＩＣｓの需要が鈍化しないとすれば、新たな課題がわが国に生まれるのではなかろうか。それはＣＡがこれまでのように実行できるのかということだ。

ＣＡは、ガットウルグアイラウンドで、「日本は95年から00年までの６年間、毎年、生乳換算で13万7,200㌧の乳製品を輸入する」ことが決まり、新ラウンドが決着していないことから、01年以降、現在の07年度まで同量の乳製品を輸入してきた。

ところが、最近のように、国際乳製品相場が高騰し、一方で、豪州の大干ばつやＥＵのクォータもあって、乳製品自体も不足基調になると、輸入義務の履行に大変な足かせになるという一面が生じることになるのではないかとの懸念が出ている。その懸念は輸入量についてであり、輸入価格についてもしかりである。

これまでは、輸入する乳製品は世界にふんだんにあり、価格も安いという面があった。いわば、「ＣＡをしぶしぶ飲んで、約束事を果たしてきた」状態だったが、07年度のＣＡバターのように、内外価格差もほとんどなくなり、輸入量の手当もこれまでのように簡単ではなくなった現在、焦点は価格よりも輸入量の手当に移った気配さえある。

「モノが不足すれば値は上がる」というのは経済の原則だが、恐らく、わが国のＣＡ乳製品とともに、それ以外の乳製品輸入もラチ外ではすまされない。豆腐や納豆がひと晩で３倍になったといわれるほど、73年から74年にかけて猛烈なオイルショックの直撃を受けたわが国だが、その当時よりも乳製品需要のグローバル化がはっきりした現在、来年は、加工原料向け乳価が現状のままであれば、国産物よりも高い乳製品を買ったり、買わざるを得ない事態になると推察される。ＣＡで輸入する乳製品は、バターであれ、脱脂粉乳であれ、わが国の判断に任されているが、輸入価格は国際相場がベースとなる。輸入量は国際約束だから守らなければならないが、輸入価格の規定はない。従って、輸入量消化のためには高い輸入価格に目をつぶるということは決して絵空ごとではない。このため、酪農乳業界は消費者に、こうした世界の状況を伝えるとともに、国産乳製品の重要性を訴え続けていきたいものである。